科目名・単位数	統計学概論　２単位	科目分類	情報・統計系	基礎科目
配当年次	１年次・春学期・土曜			
履修形態	選択	担当教員	袖山（そでやま）　則宏（のりひろ）	

授業概要	目的：確率論、統計学について学習します。 確率変数の分布関数・密度関数など古典的確率論と、標本分布・区間推定・母集団の検定など確率・統計の基礎を“数式に苦手意識を持つ学生”にも丁寧に指導していきたいと考えています。 進め方は、基本講義形式としますが、単に数式を暗記するのではなく、概念のイメージを掴むことに重点を置き、そのためにも随所で Excel 実習を盛り込むなど実践力を強化することに拘ります。 ファナンス論受講者・受講希望者にとって有意義な「リスク管理法」についても紹介します。
到達目標	確率・統計学の基礎的な考え方を身に付け、区間推定と検定を適切にできる能力を身に付けます。
授業方法	レジュメに基づいて講義を進め、PC（表計算ソフト）を用いて演習することを検討しています。
事前・事後学習	事前にはレジュメの該当箇所を読んでおくことが求められる（90 分程度）。事後学習としては、授業で扱った個所の例題等を再度解きなおして確認してください。（90 分程度）
成績評価の方法	適宜行う必須課題と講義内での発言内容によって総合評価します。教員の立場から学生諸君に積極的にディスカッションの機会を働きかけますので能動動的に参画してください。
フィードバックの方法	必須課題のフィードバックはメールにて都度実施します。
履修上の注意	表計算ソフトを使うので、ノートパソコンを忘れずに持参願います。

授業計画	
第１回	イントロダクション： ・本講義の概要について解説します。 ・第２回の講義以降について学生諸君とディスカッションを行います。
第２回	統計の基礎①： ・度数分布表、ヒストグラム等について学び、その演習を行う。また確率と確率分布について学習します。
第３回	統計の基礎②： ・度数分布表、ヒストグラム等について学び、その演習を行う。また確率と確率分布について学習します。
第４回	標本分布の特性値①： ・標本分布の形状について理解し、中央値や平均値などの中心的傾向の特性値と分散や標準偏差などの変動の特性値について学び、その演習を行います。

第 5 回	標本分布の特性値②： 標本分布の形状について理解し、中央値や平均値などの特性値と分散や標準偏差などの変動の特性値について学び、その演習を行います。
第 6 回	確率の基礎①： 確率の基礎的な概念について復習します。さらに、標本空間、事象などの用語の定義と、加法定理などの基本定理について学び、その演習を行います。
第 7 回	確率の基礎②： 確率の基礎的な概念について復習します。さらに、標本空間、事象などの用語の定義と、加法定理などの基本定理について学び、その演習を行います。
第 8 回	離散型確率変数と離散型分布 離散型確率変数について学び、代表的な離散型分布として二項分布などの確率関数形や特性値を理解し、その演習を行います。
第 9 回	連続型確率変数と連続型分布 連続型確率変数について学び、代表的な連続型分布として一様分布・正規分布などの確率関数形や特性値を理解し、その演習を行います。
第 10 回	母数の推定①： 信頼係数・有意水準と中心極限定理について理解し、正規分布を利用した母平均の区間推定について学習して、その演習を行います。
第 11 回	母数の推定②： 信頼係数・有意水準と中心極限定理について理解し、正規分布を利用した母平均の区間推定について学習して、その演習を行います。
第 12 回	相関分析と回帰分析： 相関関係と相関分析、相関係数の計算方法を理解し、回帰分析の概要、最小二乗法について学習して、その演習を行います。
第 13 回	母数の推定④： ｔ分布の形状や特性値について理解し、ｔ分布を利用した母平均の区間推定について学び、その演習を行います。
第 14 回	応用①： ファイナンス論を題材としたリスク管理法を学びます。
第 15 回	応用②： ファイナンス論を題材としたリスク管理法を学びます。
テ　キ　ス　ト	レジュメを配布します。
参　考　図　書	必要に応じて授業中に指示します。

科目名・単位数	会計情報システム論　２単位	科目分類	情報・統計系	発展科目
配当年次	１・２年次・秋学期・昼			
履修形態	選択	担当教員	長田（おさだ）　芙悠子（ふゆこ）	

授業概要	今日では、かつての手作業による会計処理をコンピュータ化して、正確かつ迅速に会計処理が行われている。コンピュータは、大量処理や反復処理を極めて正確かつ迅速に遂行することができることから、会計処理のコンピュータ化が広汎に推進された。さらに、ネットワーク化により、複数事業所間あるいは親子会社間等のデータ連携や集計処理が容易にかつ即時に行うことができるようになった。このような企業活動に関する会計情報の作成や提供における、コンピュータを利用した会計について、実務的・実践的な視点で学ぶものである。
到達目標	Excel を用いて、年次決算の会計処理、製造部門を有する企業の活動と会計処理、企業における資金の管理を学ぶ。企業の経理部門及び財務部門で担う会計実務のスキルを習得する。
授業方法	講義形式、ＰＣを用いた実習形式によって行う。
事前・事後学習	・事前にテキストの該当箇所を読んで授業に臨むこと。 ・事後に講義で取り上げた内容をよく復習し、疑問点等を調べ、より理解を深めること。 なお、事前・事後それぞれについて、学習時間の目安は 90 分～120 分である。
成績評価の方法	・講義への参加状況・課題（30%） ・講義内試験（70%）
フィードバックの方法	講義内における課題の解説、質疑応答によって行う。
履修上の注意	必ずＰＣ（Excel）を持参して講義を受講すること。

授業計画	
第１回	会計情報システム 会計情報システムの全体像と特徴
第２回	営業概要と取引の入力処理Ⅰ 業務や取引の流れ、帳票類を参照した取引のデータ入力
第３回	営業概要と取引の入力処理Ⅱ 日々の取引のデータ入力と会計情報の読み取り
第４回	決算の手続きⅠ 年次決算の手続きとデータ入力
第５回	決算の手続きⅡ 年次決算の手続きと財務諸表の作成

第 6 回	製造業における活動と原価計算 　製造業の経営活動、製造原価報告書の作成
第 7 回	製造部門を有する企業の会計処理Ⅰ 　製造業の月次決算とデータ入力
第 8 回	製造部門を有する企業の会計処理Ⅱ 　取引のデータ入力と会計情報の読み取り
第 9 回	経営分析Ⅰ 　財務諸表の分析と分析指標
第 10 回	経営分析Ⅱ 　分析指標による分析評価
第 11 回	損益分岐点分析Ⅰ 　ＣＶＰ分析
第 12 回	損益分岐点分析Ⅱ 　利益計画
第 13 回	資金の管理Ⅰ 　損益計算と資金計算、資金繰り表の作成
第 14 回	資金の管理Ⅱ 　資金増減原因の分析、キャッシュ・フロー計算書の作成
第 15 回	講義の総括と講義内試験
テ　キ　ス　ト	弥生株式会社編著『コンピュータ会計　応用テキスト（最新版)』実教出版
参　考　図　書	―――

科目名・単位数	ＩＴ利用監査　２単位	科目分類	情報･統計系	応用･実践科目
配当年次	１・２年次・秋学期・夜			
履修形態	選択	担当教員	石島（いしじま）　隆（たかし）	

授業概要	今日の企業は、ＩＴ（情報技術）を利用して業務処理を行うとともに、ｅコマースの展開など営業面でもＩＴを積極的に活用している。特に大企業においては、事業の多様化・グローバル化、取引の複雑化と件数の増大により、ＩＴの活用なくしては企業の存続・発展が危ぶまれる状況である。このような企業側の変化に対応して、監査人側でも監査実務においてＩＴを活用してデータ分析を行うことが必須となっている。 そこで、本授業では、まず、ＩＴ利用監査の基礎知識として、企業における会計情報システム及び業務管理システムの機能の構成、データ構造、ＩＴを利用した内部統制機能について学んだ上で、リスクアプローチに基づく財務諸表監査のプロセスにおけるＩＴを利用した監査手続の進め方とツールの機能を学ぶ。その後、事例を用いて、財務諸表の虚偽表示リスクに対応した監査目標を特定し、監査手続の中にＩＴを利用した監査手続をどのように組み込んでいけばよいかについて学ぶ。
到達目標	リスクアプローチに基づく財務諸表監査のプロセスを理解し、財務諸表の虚偽表示リスクに対応した監査目標を特定し、ＩＴを利用した監査手続が作成できるようになることを目標とする。
授業方法	講義形式 40%、実習形式 20%、演習形式 20%とする。第 6 回～第 9 回の授業では、講義とともに実習用データを用いたデータ分析の実習を行う。第 10 回～第 14 回の授業では、講義とともに事例を用いたＩＴを利用した監査手続の作成演習を行う。第 15 回の授業では、学生に発表を求め、教員から質問と講評を行う。
事前・事後学習	第 2 回以降については、教材を事前に配付するので、事前に読んで、疑問点・不明点を洗い出しておくこと。特に事例を用いる第 11 回～第 14 回については、事例の資料を熟読しておくこと（90 分）。また、各回の教材の最後に「今回のまとめ」を記載するので、重要論点について復習すること（90 分）。
成績評価の方法	期末考査（レポート）40% 講義・演習・実習における取り組み方（授業への参加・貢献度）60%
フィードバックの方法	実習用データを用いたデータ分析の実習、事例を用いたＩＴを利用した監査手続の作成演習ともに、実習・演習の結果について、授業の中で解答例と比較して解説を行う。
履修上の注意	パソコン及びＥｘｃｅｌの基本的操作ができること。実習には監査用ソフトウェアのＩＤＥＡ（アカデミックライセンス）を利用する予定であり、操作方法については授業の中で説明する。第 6 回～第 9 回の授業はＰＣ教室で行う。但し、受講生が少人数の場合は、大学院のノートＰＣを用いて、講義室で演習を行う。

授業計画	
第 1 回	＜ＩＴ利用監査の概要とその有用性及び利用局面＞　ＩＴ利用監査の概要とその有用性及び利用局面を理解するために、ＩＴ利用監査の種類、準備と実施のステップ、データへの依拠リスク、データの検証の意味、ＩＴ利用監査の品質管理などについて学ぶ。
第 2 回	＜ＩＴ利用監査に必要なＩＴ知識（１）会計情報システムの全体像＞　ＩＴ利用監査に必要なＩＴ知識として、企業全体の情報システムにおける会計情報システムの位置づけ、会計情報の概念と会計情報データベース、会計情報システムが具備すべき要件、電子帳簿保存法における電子データ等の保存要件などについて学ぶ。
第 3 回	＜ＩＴ利用監査に必要なＩＴ知識（２）総勘定元帳システム＞　会計情報の処理プロセスの基本である総勘定元帳の作成に関する処理プロセスについて、データが加工・集計されていく過程の具体例を示すことによって、総勘定元帳システムの機能、データ構造、自動仕訳などについて学ぶ。
第 4 回	＜ＩＴ利用監査に必要なＩＴ知識（３）販売系システム＞　販売系の業務管理システムについて、新規取引、販売促進、受注、出荷、売上計上、請求、入金という業務プロセスに沿って、パッケージソフトの機能、データ構造、ＩＴを利用した内部統制機能について学ぶ。

第５回	＜ＩＴ利用監査に必要なＩＴ知識（４）購買系システム＞　購買系の業務管理システムについて、仕入先選定、発注、検収、仕入計上、請求書照合、支払という業務プロセスに沿って、パッケージソフトの機能、データ構造、ＩＴを利用した内部統制機能について学ぶ。
第６回	＜ＩＴ利用監査を利用した監査業務の全体像、入手したデータの信頼性の検証＞【ＰＣ演習】ＩＴ利用監査業務の全体像について、①目的の設定と計画の策定、②監査先との合意、③対象データの特定と依頼、④データファイルの入手、⑤データ分析、⑥レビュー、⑦報告、⑧監査調書の保存という流れに沿って学ぶ。また、入手したデータの信頼性を検証するための手法（件数・金額の合計、データの型の検証、データの漏れや重複の検索など）について学び、実習用データを用いた実習を行う。
第７回	＜データのプロファイル分析＞【ＰＣ演習】入手したデータ全体の傾向分析の手法として、区分コードなどによる分類化、クロス集計、数値の範囲による階層化、債権・債務・在庫などの年齢調べについて学び、実習用データを用いた実習を行う。
第８回	＜データの抽出、並べ替え、結合＞【ＰＣ演習】入手したデータファイルからの特定の条件のデータの抽出、特定の順序による並べ替え、複数の関連するファイルを結合する手法について学び、実習用データを用いた実習を行う。
第９回	＜統計的サンプリング＞【ＰＣ演習】監査サンプリングの基礎的な概念を解説した上で、統計的サンプリングによる試査の対象（科目、残高、取引明細、取引先など）の抽出方法について、属性（レコード単位）サンプリングと金額単位サンプリングの方法を学び、実習用データを用いた実習を行う。
第10回	＜財務諸表監査の監査手続とＩＴ利用監査の適用＞　財務諸表監査における内部統制の運用テスト、実証手続としての分析的手続及び取引・残高の詳細テストにおけるＩＴ利用監査の適用方法について、虚偽表示リスクへの対応の観点から、その全体像と具体的な手法について学ぶ。
第11回	＜販売取引プロセス及び売上債権の監査手続への適用＞　販売取引プロセス及び売上債権の監査手続におけるＩＴ利用監査の適用方法について、事例を用いて監査目標を特定し、ＩＴを利用した監査手続の作成演習を行う。
第12回	＜購買取引プロセス及び仕入債務の監査手続への適用＞　購買取引プロセス及び仕入債務の監査手続におけるＩＴ利用監査の適用方法について、事例を用いて監査目標を特定し、ＩＴを利用した監査手続の作成演習を行う。
第13回	＜棚卸資産及び売上原価の監査手続への適用＞　棚卸資産及び売上原価の監査手続におけるＩＴ利用監査の適用方法について、事例を用いて監査目標を特定し、ＩＴを利用した監査手続の作成演習を行う。
第14回	＜不正会計に対応した監査手続への適用＞　不正会計に対応したＩＴ利用監査の適用方法について、事例を用いて監査目標を特定し、ＩＴを利用した監査手続の作成演習を行う。
第15回	＜総まとめ＞　本授業の総まとめとして、学生に発表を求め、教員から質問と講評を行う。発表テーマは、「財務諸表監査におけるＩＴ利用監査の監査局面ごとの適用方法（不正会計事例等を利用）」を予定している。
テキスト	授業の際に教材を配付する。なお、第２回以降については、教材の電子データを事前に配付する。
参考図書	『Q&A 監査のための統計的サンプリング入門 改訂版』富田竜一他著、金融財政事情研究会 『取引別・勘定科目別 虚偽表示リスクを見抜く監査ノウハウ』手塚仙夫著、中央経済社